異世界じゃスローライフはままならない２
～聖獣の主人は島育ち～

A L P H A L I G H T

夏柿シン
Natsugaki Shin

アルファライト文庫

ノクス
森で倒れているところをライルに救われた魔物。今はアモンの弟分。
アモン
ライルの前世の愛犬。彼を追って世界の壁を越え、聖獣となった。
アサギ
しっかり者なアイスドラゴン。双子のシオウに対して、お姉さんぶりがち。
シャルロッテ
バーシーヌ王国の王女様。お転婆で周囲を振り回すが、根は真面目で努力家。
シオウ
やんちゃなサンダードラゴン。何かとカッコつけたがり。
ライル
自然を愛する元島育ちの青年。子供を助けて命を落とし、異世界に転生した。
登場人物紹介 CHARACTERS

第一章　異世界の学生は大忙し

「私たちが見てないからって、だらしない生活をしちゃダメよ」
「都会には変な人がいっぱいいるんだ。知らない人についていくなよ」
「わかってるよ。みんなもいるし、大丈夫だって」
　日本の島で育ち、不慮の事故で命を落として異世界に転生した俺――ライルが、瘴気を取り込み【瘴魔化】したマンティコアを倒してから約一年、八歳になった俺は今日、生まれ育ったトレックを離れ、王都に向けて出発する。
　母さんのリナと父さんのヒューゴはその見送りに来ていた。見送りといっても村にほど近い聖獣の祠までだ。王都へは俺のおじいちゃんでハイエルフのシャリアスが村長を務める森の民の村の方が近いので、いったんそちらに行くことになっている。
「僕がいるから大丈夫だよ」
「僕もいるし」
「俺たちも父上を守るぞ」

「うんうん」
日本でも俺の相棒でこちらに来て聖獣となったアモン、カーバンクル種でナイトメアアポストルという魔物に進化したノクス。それにドラゴンのシオウ、アサギは自分こそが俺を守るんだという風に胸を張っている。
「あなたたちにも言ってるのよ。大事な家族なんだから」
「そうだぞ。お前たちも可愛いんだから変なやつに誘拐されないように気をつけろよ」
「「「はい！」」」
母さんと父さんの言葉に、いい返事をする従魔たち。
「まぁ寂しいけど、いつでも帰ってこられるんだ。あんまり言ってもしょうがないか」
「それもそうね。とりあえず気をつけて行きなさいね」
俺は両親に元気よく頷いてみせる。
「うん。行ってくるね！」
「「いってらっしゃい」」
湖の精霊エレインの力で森の民の村に転移した後、村人のみんなに見送られながら、俺は王都に向けて出発した。

メンバーは俺、アモン、ノクス、シオウ、アサギに加えて、大樹の精霊ヴェルデ、シルバーウルフからフェンリルに進化したシリウス、そしてシルバーウルフのギンジ、ロウガ、ユキだ。
俺とノクスはアモンに、【完全人化】したシオウとアサギはロウガとユキに、こちらも人の姿に変身したシリウスはギンジに乗り、ヴェルデは飛んで道を進む。
シリウスがわざわざギンジに乗っているのは、彼が【人化】していないと俺、アサギ、シオウの子ども三人でいるように見えて、盗賊に狙われる可能性があるからだ。
精霊のヴェルデにずっと実体化してもらうのも申し訳ないし、ギンジが行きたそうだったのでこの体制になった。
森の民の村から王都までは普通四日かかるのだが、アモンたちの足なら休憩しながらでも一泊すれば余裕だった。
「父上ー！　もしかしてあれが王都？」
「そうみたいだね」
「すげぇな！　あんなでっかい壁初めて見るぞ」
シオウが言うと、シリウスも口を開く。

「ガーボルドの町を見た時も驚いたけど、全然比じゃないな」
『森から出てみるもんだな』
『あぁ……俺もついてきて良かったぜ』
『あの中にお城があるんだぁ』
シルバーウルフたちも【念話】で感動の声を漏らしていた。
俺も同感だ。
入場門には検問の順番待ちの列ができていた。
もちろん俺たちもちゃんと並んで順番を待った。
「はい、じゃあ君たち。市民証か許可証はある？」
「これです。お願いします」
俺はおじいちゃんから貰った許可証を出した。
「これは……！　みなさんはこちらからお願いします」
衛兵はそう言うと、入場門の横の建物の扉を開ける。
建物に入ると部屋に通され、迎えが来るので待つように言われた。
待っている間、衛兵の人がチラチラと俺を見ていたので、さすがに気になって聞いてみた。

「あの……なんかありましたか？」
「いえ！　そうではなくその……握手を……握手してください！」
俺は一瞬固まったが、聞けばこの衛兵は父さんのファンらしく、息子の俺のことも王都の噂で知っていたそうだ。
父さんと母さんは王都で冒険者をやっていたことがあり、その時に王族のジーノさんと組んでいた『瞬刻の刃』というパーティは最強の呼び声高く、知らぬ人はいないほどだったらしい。
ちなみに俺に関する噂とは、以前国王が発表した最年少従魔師のことだろう。
「別に握手くらいいいですよ」
俺が軽く応じると部屋の外にいた別の衛兵が「隊長ずるいですよ！」と入ってきて、結局衛兵のみなさんと握手することになってしまった。
握手会をしていると、獅子の獣人で俺とも顔見知りの近衛騎士団副団長、レグルスさんが部屋に入ってきた。
「おい、お前たち。何をやっているんだ？」
「あ、あのその……握手を……」
「そうかそうか。よかったな、休日をたった二日没収されるだけで仕事中にライル様と握

手できて」
「えっ！　それは――」
「もっと没収してほしいのか？」
「いえ！　申し訳ございませんでした」
レグルスさんって厳しいんだな。
まぁ副団長だし、当たり前か。
「ライル様、馬車のご用意ができました。陛下がお待ちですのでこちらへどうぞ」
俺が頷いてレグルスさんについていこうとすると、まだ握手できていなかった二人が悲しそうにしていたので、こっそり握手してあげた。
握手していないのに休日没収はかわいそうだ。

俺たちはそのまま馬車に乗って王城に向かう。
仰々しいのは嫌だった俺がアモンに乗って馬車についていくと言ったら「目立つのでおやめください」と言われてしまったよ。
王城に着くと、王家の人たちが待っていた。
城には俺や従魔の事情を知らない人も多いので、俺以外は別の場所で待機だ。

「ライル、よく来たな。正式な謁見の場ではないから、いつも通りでよいぞ」
「しばらく見ないうちに男前になったわね。良かったわね、ロッテ？」
「もうおばあ様ったら！　変なこと言わないで！　ライル、久しぶりね。本当は去年も森の民の村に行きたかったんだけど、お父様がライルは王都の学園に通うことになると思うから一年くらい我慢しろって言われたの。でも本当に王都に来てくれて嬉しいわ」
国王のハンス陛下、イレーヌ王妃、彼らの孫のロッテが俺を歓迎してくれた。
他にはロッテの父で王太子のマテウスさん、彼の妻ヒルダさん、レグルスさんがこの場にいる。
しかし、俺が知らない人が二人いた。
すると、マテウスさんがにっこり笑って言う。
「紹介するよ。こいつが俺の弟のルイ。財務を担当しているよ。そしてこっちが近衛騎士団長のオーウェンだ」
「よろしく」
「オーウェンです。よろしくお願いします」
俺は二人に挨拶を返してから、マテウスさんに尋ねる。
「ジーノさんは今日いないんですか？」

「あれ、聞いてないの？　ジーノは国境警備に行かせたんだよ。国境では軽率な行動一つで軍事衝突になるからね。緊張感を持ってもらうためにはいいと思って」

父さんたちと冒険者をやっていたジーノさんはマテウスさんの弟で、軍務卿という国家の軍事を司る重要な仕事についているのだが、ちょっとばかり……いやかなり短絡的な人だ。

それにしても軍務卿自ら国境警備とは大胆な人事だな。

俺がそう考えていると、国王が口を挟む。

「まぁその話はいい。今日はライルの顔が見たかったのと屋敷の鍵を渡そうと思ってな」

「屋敷までご用意いただいてありがとうございます」

「シャリアス殿から空き家でいいと言われたのだが本当にいいのか？　ちゃんと使用人のいる屋敷も用意できるぞ」

「大丈夫です。建築が得意なアーデがいますし、従魔も多いのでこちらで改築した方が都合がいいです」

父さんたちもそうだが、森の民の村の村長であるおじいちゃんは、ここ、バーシーヌ王国の王族と深い繋がりがある。

王族の男子は森の民の村、そして村がある聖獣の森で修業をするしきたりなのだそうだ。

人間よりも寿命が長いハイエルフのおじいちゃんは、何代にもわたってバーシーヌ王国王家の成長を見守ってきた。

そんな関係があるため、おじいちゃんや森の民の村は王国の中でも特別視されており、王家の人たちは俺に親切にしてくれる。

もちろん彼らの人柄でもあるのだろうけどね。

でも、使用人なんて困る。

いくら家族が有名人でも俺は貴族じゃない。

自分の家でくらい気楽に過ごしたい。

「わかった。屋敷まではレグルスが案内する。学園の入試まではゆっくりするがよい」

「ありがとうございます」

「今度私も遊びに行くからね！」

お姫様のロッテが遊びに来たら騒ぎになるのでやめてほしいが、余計なことは言わずに退出した。

俺はレグルスさんの案内で屋敷に到着した。

『ここが新しいお家？　おっきいね』

『前の家でも結局お部屋が余ってたのに、また余っちゃうね』

アモンとノクスの言うとおりだ。

これは無駄にデカい。

「レグルスさん。僕、こんなに大きな家じゃなくていいんですけど」

「陛下のご厚意ですのでどうか受け取ってください。これでもライル様のお気持ちを考えたマテウス様が説得してだいぶ小さくなったのです」

「……わかりました。ありがたく使わせていただきます」

まぁ広い分にはいろいろ作れるし、いいか。

改築にはこういうのが得意な土の精霊アーデを呼んで相談しよう。

家の改築をアーデにお願いして、俺はアモンと実体化したヴェルデを連れて散策に出た。

他のメンバーも来たがったけれど、あんまり大勢だと注目されるし、店を見て回りたかったから申し訳ないが家に残ってもらった。

散策の目的は市場調査だ。

実は俺はこの世界の相場がいまいちわかっていない。

田舎だからお金を使う機会があまりなかったのもあるが、一番の原因はキャッシュレス

が地球よりも進んでいることだ。

この世界では身分証をＩＣカードのように使用してお金のやり取りができる。

身分証というのは、王都などの大きな町で発行している市民カードや各ギルドが発行しているギルドカードなどだ。

父さんたちもギルドカードをちゃんと持っていた。

前に「引退したのになんで持っているの？」と聞いたら、冒険者の引退は自分たちで宣言して廃業するだけでギルドに申請が必要なわけではなく、好きな時に再開できるらしい。

長く活動していなければランクは下がるが、冒険者の身分は処分によって剥奪されない限り有効なようだ。

そんなわけで俺は家族がお金のやり取りを現金でしているのを見たことがない。

近所のおばさんから買うミルクが三リットルで小銅貨五枚、来る途中に泊まった宿が全員で銀貨三枚だったということしか知らず、それが高いのか安いのかもよくわかっていないのだ。

そういうわけで訪れたのは食料品の露店が並んでいるエリアだ。

まずミルクの値段を確認すると一リットルで中銅貨三枚だった。ということはトレックに比べるとかなり相場が高いのだろうか。

次に肉。

一番安いボアの肉が一キログラムで大銅貨二枚かぁ……

「おぅ！　ライルじゃねぇか！」

急に声をかけられたので振り返ると、以前俺の護衛依頼を引き受けてくれた冒険者パーティ『鋼鉄の牛車』のリーダー、アスラとダークブロンドヘアが特徴的なお姉さん、パメラがいた。

「お久しぶりです。どうしたんですか？」

「ライルが王都に来たって聞いて、会いに行こうと思ってたら見かけたんだよ。お前こそ何やってんだ？」

アスラに聞かれ、俺はお金のことがわからないと素直に話した。

「なんでもできちゃうライルもちゃんと子どもだったのね。安心したわ」

パメラが笑って言うと、アスラも頷く。

「そうだな。じゃあ簡単に俺たちが教えてやるよ」

それからアスラたちは一般市民の生活レベルを教えてくれた。

まず王都の市民は家族四人で銀貨三十枚あれば一ヵ月生活するには困らないらしい。

王都で一番お金がかかるのは税金、家賃、食費だ。

税金や家賃は住む区画によって相場が異なるが、一般市民は家族四人で税金と家賃合わせて銀貨十五枚くらいの家に住むのが普通だという。

食料は基本的には冒険者が採取したものを商人が買い取って店で売っているが、やはり他の町に比べて高いそうだ。

ただ俺が入学する予定の王立学園は、学費が一切かからないので、生活費が多少高くても子どもを学園に行かせる家庭は多いらしい。

アスラたちの話を整理すると、大体の通貨価値が理解できた。

この世界の通貨は銅貨が小中大と三種類あり、その上に銀貨、金貨、白金貨とある。

小銅貨から銀貨までは十枚で上の通貨一枚と同等で、銀貨から上は百枚ごとだ。

価値としては大体銀貨一枚が一万円くらいだと思う。

まとめると――

白金貨：一億円
金　貨：百万円
銀　貨：一万円

大銅貨：千円
中銅貨：百円
小銅貨：十円

これくらいを目安に考えた方がよさそうだ。
俺はアスラさんに尋ねる。
「アスラさんたちはどれくらい稼いでいるんですか？」
「俺たちは仮にもAランク冒険者だからな。浮き沈みはあるが、月に金貨二枚くらいは稼いでるぞ」
「でも冒険者ってお金がかかるのよ。高ランクの依頼をこなすためには武器や防具、アイテムにもお金をかけなきゃいけないし、他の町に行くには馬を手配したり宿をとったりしなきゃいけないしね。だから裕福ってわけにはなかなかいかないの」
「冒険者ってのは金よりも自由や名誉が欲しいやつがなるもんなんだよ」
確かに来る途中に武器屋のショーウィンドウに並んでいた武器は金貨十枚する物もあった。
きっとあの武器は強いだけじゃなく、持っているだけで名誉なんだろう。高級外車みた

いなものかもしれないな。
そんなことを考えていると、パメラが聞いてくる。
「ところで買い物しないでいいの？」
「来る途中に狩った魔物がいるので今日はいらないです」
「そうか。まぁ移動中の狩りなら問題ないか」
アスラが何やら意味深に呟いたので、俺は気になって尋ねる。
「もしかして勝手に狩りしちゃまずいんですか？」
「あぁ。都市部では狩りは冒険者の仕事だからな。依頼以外でもどんな魔物を狩ったのか、何を採取したのかはギルドに届ける義務がある。それから乱獲を防止するために狩りできる魔物の種類や量も冒険者のランクによって制限される」
広大な森に少人数が暮らしている聖獣の森と違い、都市部では乱獲であっという間に生態系が壊れ、魔物の大量発生――スタンピードなどが起きてしまう。それを防ぐためにも冒険者ギルドの役割は非常に重要なのだそうだ。
「今回のことは私からギルドに上手く報告しておくから、途中で狩った魔物の種類と数だけあとで教えて」
「では屋敷に戻ったら私からお教えします」

報告を引き受けてくれたパメラにヴェルデが答えた。
おかげで密猟者にはならなくて済みそうだ。
ただ、自由に狩りができないとなると――
「しばらくはみんなの食費は結構大変だね……」
「冒険者業を始めるまでは王都に呼ぶ従魔の数は最低限にしましょう。必要ならいつでも召喚できますから」
ヴェルデが提案してくれた通りにした方が良さそうだ。
それに聖獣の森を警備する従魔の数が少しでも多いに越したことはない。
『僕は必要最低限だからね！』とアモンはしっかり主張していた。
「ところでクラリスさんは一緒じゃないんですか？」
俺が『鋼鉄の牛車』のもう一人のメンバーの名前を口にすると、パメラが「あっ」と声を出した。
「忘れてた！　ライルくんってマルコと友達でしょう？　マルコが今王都にいるらしいのよ。だから、彼と幼なじみのクラリスが声をかけて一緒にライルくんの家に向かうって言ってたんだわ」
マルコさんは俺の故郷トレックによく来ていた旅商人だ。

日用品を売るかたわら従魔術の研究をしており、俺がアモンやノクスを従魔にするまでは彼が最年少従魔師だった。
いわば従魔術の第一人者だ。
俺も従魔術の基本を彼に教わった。
「家に残してきたアーデたちからはなんの連絡もないのでまだ来てないと思いますけど、早めに戻った方がよさそうですね」
俺はアスラさんたちと一緒に、屋敷に向かった。

俺たちが家に戻るとちょうどクラリスとマルコさんが着いたところだったので、とりあえず中に入ってもらう。
俺はまだ作業していたアーデに声をかける。
「アーデ、お疲れ様。みんなも手伝いありがとう」
身長が二十センチほどのアーデは俺の肩に乗って言う。
「とりあえず生活できるように補修はしたぜ。改築作業はまだまだだけどな」
『僕も結界の付与をお手伝いしたよ！』
「うん。ありがとう、ノクス。アーデもいったん休憩していいよ。アスラたちが来てくれ

たんだ」

アスラたちが森を出て王都に戻ってからはみんな会っていなかったし、マルコさんにも二年半くらい会えなかった。

『アスラが来てるのか⁉』

『クラリスとパメラもいる？』

そう言いながら二階からシオウとアサギがありのままの姿――つまりドラゴンの見た目で飛んできた。

「ひーーーーっ！　なんでド、ドラゴンが！」

あっ……やってしまった。

マルコさんが声を上げ、しりもちをついたのを見て俺は慌てて二人に言う。

「シオウ、アサギ。とりあえず人化……したね」

二人もやばいと思ったのか、すぐに人化したようだ。

「ごめんなさい。知らない人がいると思わなかったんだ」

「久々に人化しないでいられてたから……」

「いいよ。マルコさんはいろいろ事情を知ってる人だから。でも知らない人が来ることはこれからもあると思うから、気をつけてね」

俺はそう言って、クラリスに介抱されているマルコさんに駆け寄った。

「すみません。事前に説明するべきでした」

「うんうん。それよりも彼らは何？　俺の見間違いじゃなきゃドラゴンに見えたんだけど」

「はい。シオウとアサギっていって俺の従魔のドラゴンです」

「そ、そうなんだ……」

困惑するマルコさんにクラリスが言う。

「マルコ、あなた知らなかったの？　アサギとシオウが生まれてからずいぶん経つわよ」

「クラリスに言わなかったっけ？　こないだ村に行ったのはちょうど洗礼の儀の時期でね。ライルくんどころかヒューゴさんたちもいなくて会えなかったんだ。だからライルくんに会うのは久しぶりなんだよ」

洗礼の儀とは、五歳になった子どもがステータスボードを授かる儀式のこと。

森の民の村では毎年王族や貴族の子どもたちの洗礼の儀を行っており、俺たちはその度に村へ赴き、パーティーに参加するのが恒例だった。

それにしても、マルコさんとはすれ違いだったわけか。

もうトレックに興味がなくなってしまったのかと思った。

「とりあえず向こうで話されてはいかがですか？　よろしければ夕食もご用意しますので召し上がっていってください」
　ヴェルデがそう促して、俺たちはとりあえず客間に移動した。

「毎回驚かせてしまって本当にすみません」
　俺が改めてマルコさんに謝罪すると、彼は笑って首を横に振る。
「いいんだ。僕の見通しが甘かっただけだよ。ライルくんは規格外だもんね。それよりもドラゴンって、そんなに完璧な人化ができるんだね」
「人前に出るために頑張ってくれたんです。ドラゴンのままじゃ騒ぎになるので。さあ、二人とも自己紹介して」
「シオウです。びっくりさせてごめんなさい」
「アサギです。ごめんなさい」
　二人はちゃんと頭を下げた。
「マルコだよ。よろしく。こちらこそ大きな声を出しちゃってごめんね」
「父上の友達なのか？」
　シオウが尋ねると、マルコさんは首を傾げる。

「父上？　ライルくんのことかな？　そうだよ。僕も従魔師でね。ライルくんとは仲良くさせてもらっているんだ」
「マルコさんが僕に遠隔での【念話】や【召喚】の仕方を教えてくれたんだよ」
　俺がそう言うと、アサギが目を輝かせる。
「すごーい！　父上の師匠なんだ！　じゃあマルコさんも従魔がいるの？」
「いるよ。みんな別のところで待っててもらってるけどね」
　なるほど、そうだったのか。
　今日はいつもマルコさんのそばにいるワイルドベア、ウーちゃんがいないから少し気になっていたんだ。
「ウーちゃんが一緒じゃないのは珍しいですね？」
「町では連れて歩かないことの方が多いんだ」
「ウーちゃんは可愛いし良い子だけど大きいからね」
　クラリスが空になったグラスの氷をクルクルしながら言った。それを察知したのかキッチンにいたはずのヴェルデがすかさず飲み物を持ってきて補充した。
「僕は旅商人としてお得意様のところを回らなくちゃいけないから、連れていっても結局外でずっと待たせることになっちゃうんだよね」

「じゃあ王都にいる間、従魔はどこにいるんですか？」
「従魔だけを預かってくれる専門の宿が王都にはあるんだよ。窮屈な思いをさせて悪いんだけど、こればかりは仕方ない」
「うちの裏庭でよければウーちゃんとか静かな子は呼んでもいいですよ。田舎じゃないので鳴き声が大きい子は難しいですけど」
俺はマルコさんに場所の提供を申し出た。
とはいえ、お隣も近いし、まだご近所に挨拶もしていないのでうるさくしてはまずいだろう。
「ライル様、大きい声を出しても大丈夫だぞ」
隣でノクスと話していたアーデが突然口を挟んできた。
「どういうこと？」
「ノクスに協力してもらって防音の結界を張ってある。しかも外の音はある程度聞こえる優れものだ。全く周りの音がしないのも良くないからな」
「おい、簡単に言うが、それってすげぇ技術だからあんまり外で言うなよ」
アスラがすかさず釘を刺してきた。
俺はアスラの言葉に頷くと、マルコさんに言う。

「ということらしいので、マルコさんの従魔を呼んでもらってもいいですよ」
「本当かい？　さっきからウーちゃんたちも念話でみんなに会いたいって言ってたんだ。お言葉に甘えさせてもらうよ」
その後、マルコさんは裏庭に出て従魔を召喚した。
アモンたちはマルコさんの従魔との久々の再会にはしゃいでいる。
そこへヴェルデが声をかけてくる。
「さぁ、みなさんの食事が用意できましたよ。村の酒もお土産で持ってきているので今夜はゆっくりしていってください」
「酒までご馳走になっていいのか！　森の民の酒が恋しかったんだよ」
「こっちだと高級品なのよね」
酒が大好きなアスラとパメラは大喜びだ。
さすがヴェルデは用意がいいな。
王都に来て最初の夜は、とても楽しい時間になった。

◆

それから一ヵ月後――

ついに王立学園の入試当日を迎えた。

王立学園の入り口には多くの人が集まり、受付に並んでいる。

俺とシオウ、アサギはマテウスさんから一番左の列で受付するようにと指定されていた。

「おいお前！　見かけないやつだな。どこの家のものだ？　家名を言え」

いきなり声をかけられたので振り返ると、知らないおっさんがいた。

感じの悪い脂ぎったおっさんだ。

子どもを連れているので保護者なんだろう。

「僕に家名はありません」

「じゃあどけ。ここは貴族専用の受付だ。お前のようなやつが並ぶ場所じゃない」

面倒だから別の場所に行きたいが、マテウスさんに指定されているから移動するわけにもいかない。

「申し訳ありませんが、ここを指定されて――」

「儂に口答えするのか！　切ってもいいんだぞ！」

その一言でシオウとアサギが俺を守るように前に出た。

「なんだその態度は！　おいそこの衛兵、このガキどもを不敬罪で捕らえろ！　早くし

ろ！」

おっさんに命令された衛兵が困った顔をしながら近づいてきた。

だが俺はこちらに近づくもう一人の人物の気配に気付いていたので、冷静だった。

その人物――マテウスさんはおっさんと俺たちの間に立つと、にこやかに話しかける。

「これはこれは、トフテール伯爵。いかがなさいましたか？」

「あぁマテウス様。いえ、この子どもが貴族でないと言うので別の列に並ぶように言ったのに口答えをし、さらに儂に敵意を見せたので不敬罪で捕らえるように言ったのです。別に法律上の問題はありませんよね？」

イラッとするほどふてぶてしい言い方だ。

息子も息子でニヤニヤしてこっちを見ている。

「君は貴族じゃないと言ったのかい？」

マテウスさんが俺のことを名前ではなく君と呼んだ。

しかもわざとらしい。

これは絶対なんか企んでいるな。

「家名を言えと言われたのでありませんと答えました」

「それはそうだね。ライルくんは森の民の長であるシャリアス殿の孫だ。貴族とは立場が

違うのだから、家名などあるわけない」
マテウスさんがそう言いながらトフテールを冷たく睨んだ。
「ラ、ララライ……ライ……」
マテウスさんの言葉を聞き、トフテールは青ざめて震えている。俺の名前が言えずにどこかで聞いたリズムネタみたいになっていた。
「あなたはわが国と森の民との関係を陥れたいようですね？」
「い、いえ……決してそのようなつもりは……」
「すぐにこの者を国家反逆罪の疑いで捕らえよ！」
瞬く間に衛兵が取り囲み、トフテールを連れていった。
息子は「お父様！」と叫びながら追いかけていく。
「全く大変な目にあったねー」
「マテウスさん、最初から見てましたよね？」
俺はトフテールに声をかけられる前から受付の近くにマテウスさんがいるのに気付いていた。それなのに彼はすぐには来なかった。
「ごめんごめん。あいつは改革派の貴族でね、貴族特権を振りかざすのが大好きなやつなんだよ。ずっと潰したいと思ってたからちょうどいいと思って、少し様子見ちゃった。シ

オウたちの件で協力するんだから、これくらいは許してよ」
マテウスさんは周りに聞かれないように小声で耳打ちしてきた。
ちなみにシオウたちの件とは、彼らを学園の入試に参加させる手続きを王族特権で行うことだ。
入試を受けるには当然身分を証明する必要があるのだが、シオウとアサギは俺の従魔なのでそれができない。
とはいえ、珍しい魔物であるドラゴンの二人を従魔として連れ歩くことも難しい。だから俺が王都にいる間の護衛という名目でそばにいられるように、マテウスさんが協力してくれたのだ。
「顔に似合わずあくどいんですね？」
「貴族ならこれくらいは当たり前さ。それじゃ、試験頑張ってね。学園の設備は壊さないようにねー」
マテウスさんはそう言って颯爽と去っていった。
残された俺たちは注目されてしまったので、そそくさと受付を済ませて会場に入った。
指定された教室に入るとすでにロッテが席についていた。俺に気付いてロッテが手を

振ってきたが、それを見た試験官が咳払いした。
「みなさんお知り合いの方がいるかもしれませんが、試験が終わるまではお静かにお願いします」
ロッテが恥ずかしそうに俯いた。
お姫様が注意されちゃいけないだろう。

開始時刻となり、筆記試験が始まった。
内容は読み書き、算数、歴史、魔法学。
予想はしていたが本当に簡単だ。
でも八歳の子どもが受ける試験としては、日本に比べてレベルが高いのかもしれない。
算数は分数の掛け算まであるし、歴史と魔法学では記述式の問題があった。
入試の成績でクラス分けが決まるため、成績の差が開きやすいようにしているのかもしれない。
ちなみにシオウとアサギにも不正は一切許していない。
念話でのカンニングもなしだ。
マテウスさんからも試験を受けられるようにするだけで、そのあとは自力で頼むと言われていた。

王立学園の理念は「身分に関係なく教育を」なのだから、当たり前だろう。
だから二人はこの一年本当に頑張っていた。特待生になり、絶対俺と同じクラスに入ると必死で勉強したのだ。
まあ、この程度の内容ならおそらく大丈夫だろう。

筆記試験が終わると、今度は実技の会場に移る。
実技の前半は基本的な武器の扱いを見る試験だ。剣、斧、槍、弓の中から一つを選び、それぞれ別の会場で試験を行う。
俺は弓を、シオウは斧を、アサギは剣を選んだ。
ロッテはきっと剣か槍だろう。
心配なのはアサギだ。
アサギは魔法メインで武器の扱いが苦手なのだ。近接戦になった時のため、一応格闘を教えているが役には立たない。
彼女を信じるしかないだろう。
弓の試験会場は人が少なかった。

華がある武器じゃないし、あまり人気がないのかもしれない。
試験はゲームのような内容だ。
大小の的が全部で三十あり、それぞれにポイントが付いている。もちろん的が小さいほどポイントが高い。
三十のうち五つが動いていて、その的のポイントはさらに高くなっている。
動いていると言っても規則的だから難度はさほど高くない。
制限時間は一分だ。
「二十一番。前へ」
俺が最初に呼ばれた。
他の子の実力が見たかったけど、仕方ないだろう。
特待生になっておきたいし、ここは全力でやろう。
「では開始！」
試験官の声を合図に、俺は神経を研ぎ澄ませた。
最初に手前の的に隠れている奥の的に向け、曲射した。そのあとはタイムロスをしないように端から順番に狙っていき、三十個全ての的を射貫いた。
「すごい……時間内に全ての的を射貫いたの？　しかもその場から一歩も動かずに」

試験官の女性が信じられないというような顔で俺を見た。
「動いて良かったんですか？」
「えぇ……ごめんなさい。動かないで撃とうと考える子がいると思ってなかったから」
どうやら俺は無駄に曲射を披露してしまったようだ。
他の受験者も呆然としている。
「えっと、とりあえず次の実技会場に移動してください」
言われるがままに会場を移動しようとすると、後ろから「今のは普通じゃないので忘れてください」と他の受験者に伝える女性試験官の声が聞こえた。

実技の後半は魔法の試験だ。
こちらも弓の試験と似たようなものだった。
地、水、火、風の四属性の的があり、自分の出せる最大の威力の魔法を対応した的に当てればいいだけだ。
その威力によって数値が表示されるというものだった。
的には別の属性の魔法に対して耐性が付与されているので、数値が低く出てしまうらしい。

ちなみにこの世界には先ほど挙げた四属性の他に、そこから派生した様々な属性が存在する。シオウが使う雷属性などもその一つだ。

しかし、俺が得意とする聖属性については、先の四属性とは関係がない特殊なものだ。

「自分が使える属性の的だけ撃ち抜けばいい。四属性とも使えるなら四つとも当てていいぞ。子どもの魔法で簡単に壊れるようなものじゃないから安心してやるんだ」

試験官はそう説明した。

俺もここで最大威力の魔法を放つほど馬鹿じゃない。自分の魔法の実力が一般の子どもより高いことはさすがに理解している。他の子が使っている魔法の威力を参考に、それよりも少し強い力で撃てばいいだろう。

ドドーーーーーン！

順番を待っていると、地面が揺れるほどの凄まじい音がした。

受験生はもちろん生徒たちも驚いて動揺した。

「剣の実技の会場の方だ。俺が見てくるからみんなは試験を続けてくれ」

試験官の一人が向かった後、試験が再開された。

「次、二十一番！」

俺の番だ。

今回は立つ位置に印がついているので、動かない方がいいのだろう。

きちんと威力を調整し、四つの的を全て撃ち抜いた。

「は？　今のはなんだ⁉」

「えっ？　ファイアアローとアクアボールとエアバレットとアースランスですけど」

試験官に聞かれたので、素直に答えた。

あれ？　俺なんか間違えたか……初級魔法だし、威力は抑えている。無詠唱だってそこまで珍しくはないはずだ。

その時、少し遠くで見ていたらしき、紫がかった髪が特徴的な女性が近くに来て尋ねてきた。

「もしかして【並列魔法】ができるの？」

俺はその言葉を聞いて、ハッとする。

そうか！　いくつかの魔法を同時に発動する【並列魔法】は前に父さんがとんでもないって言っていた。

威力を調整するのに集中するあまり忘れていたよ。

その女性がさらに言う。

「しかもアースランスがあの位置から飛び出したってことは【遠隔魔法】も使ったよね？」

「は、はい……」

【遠隔魔法】は自分の手元から離れた位置に魔法を発動する技だ。

嘘をついてもしょうがないので、俺は頷いた。

「わかった。その実力ならきっと威力も抑えているね。とりあえず今日の試験は終了だから君は帰っていいよ」

彼女はそう言うと、試験官に耳打ちして去っていった。

俺は試験会場をあとにし、入り口でシオウとアサギを待った。

しばらくして会場から出てきた二人は浮かない顔をしていた。

「なんかあったか？」

俺が尋ねると、シオウが呟くように答える。

「俺さ、筆記試験でわからなかったところがあって、それを実技で取り戻そうとしたんだ。でも魔法の試験が四属性使うやつだったじゃん。俺、風魔法しか使えないから雷魔法を放ったんだ」

「雷魔法は風魔法の派生だから問題ないだろう？」

「うん。でも間違えて土魔法の的に当てたんだ。しかも的が壊れちゃってさ……迷惑かけちゃったんだ」

子どもの魔法では壊れないはずの的なのに、耐性をはるかに超える威力だったから壊れてしまったのか。

今度はアサギが口を開く。

「私は剣の試験がね……魔法で強化された柱を思いっきり切りつける試験だったの。みんな何度も切りつけてすごいから私も頑張らなきゃと思ったけど、私は武器で戦うのが得意じゃないから……」

やっぱりアサギは剣の試験が難しかったんだろう。

「だから思いっきり上から剣で叩いたんだ。そしたら柱が壊れて、地面も割れちゃったの……みんなに見られてすごく恥ずかしかった」

……違った。

忘れていたが、アサギは武器の扱いが苦手なだけで力はちゃんとドラゴンなんだった。普段使っていないから手加減の仕方がわからなかったのだろう。

あの轟音はアサギだったのか。

「俺もちょっとやりすぎちゃったから大丈夫さ。落ち込んでも仕方ないし帰ろう。試験結果は明日出るんだから」

そう言いながら二人の頭を撫でていると嫌な視線を感じた。

振り返ると試験が終わったロッテがこちらを見ていた。
マテウスさんとヒルダさんも一緒だ。
ロッテがずんずんとこちらに歩いてきて言う。
「お疲れ様、ライル。ねぇその子たちはだあれ？」
「この子たちは森の民の村の戦士の子どもで、僕の護衛をしてくれているんだ」
「シオウです。父上……の命を受けて、ライル様の護衛をしています」
「同じく護衛のアサギです」
俺たちは事前に打ち合わせしていた通りロッテに伝えた。ちなみに、ヒルダさんは二人の正体を把握している。
「村には同い年の友達はいないってあなた言ってなかった？」
「トレックにはいなかったよ。それにロッテと前に会った時には、二人は森の民の村とは別のところで修業していたんだ」
「ふーん。二人はどこに住んでいるの？」
「うちに住んでるよ。護衛だからね」
「それってつまり――」
そこでマテウスさんが口を挟んだ。

「ロッテ、みんなに試験の報告をしなきゃいけないから早く行くよ」
「ちょっと待ってお父様！」
マテウスさんが無理やりロッテを連れていく。
「ロッテには上手く説明するわ。アサギちゃんのことをライバル視しちゃうかもしれないけど、仲良くしてあげてね」
それだけ言うと、ヒルダさんも帰っていった。
よくわからないが今日はいろいろあって疲れた。
とりあえず俺たちも帰って明日の結果を待とう。

◆

翌日――
王立学園の広場にはたくさんの人が集まっていた。
みんな合格発表を待つ受験生と保護者だ。
「俺、大丈夫かな……的を壊しちゃって失格になったりしてないかな？」
「私も柱を壊したもん。シオウが失格なら私もだよ……」

シオウとアサギは今朝からずっとこの調子だ。
それなら俺だって魔法実技で手加減していたのがバレたから、失格になっているかもしれない。
そもそも、特待生になって王立図書館にある貴重な書物を読んだり、冒険科で冒険者登録をして実践で技を磨いたりするために学園に入ろうとしているのだ。
ダメだった時は他に強くなれる手段を模索しようと気持ちを切り替えた。
「これより合格者を発表します！」
広場の前方にモニターのような物が現れた。
よく見てみると、広場の両サイドに立った人が魔法で空中に映像を投映していた。
あんな魔法もあるんだな。
「縦列ごとにクラスがわかれ、左上から成績順に表示されます。合格者はそのまま入学手続きにお進みください。それではご覧ください！」
掛け声とともに合格者が一斉に表示された。

首席：二十一番　ライル
次席：一番　シャルロッテ・フォン・バーシーヌ

三席：二十三番　アサギ
四席：二十二番　シオウ

「よっしゃー！　あった！　シオウって書いてあるぞ！」
「うん！　みんなあった！　しかも私三席だって！」
「これで父……じゃなくてライル様と一緒にいられるんだー！」
シオウはガッツポーズして、アサギはぴょんぴょん跳ねて喜んだ。
とりあえずこれで王立図書館の本の閲覧や、冒険者登録の件はクリアできそうだ。
無事に入学手続きを終えて帰ろうとすると、門のところにいたレグルスさんに呼び止められ、馬車に案内された。
馬車の中を覗くとマテウスさんが「やぁ」と手を挙げて、一緒に王城に来てほしいと頼まれた。
「ライルくん、それにシオウとアサギも悪いね。帰りに呼び止めて」
馬車に揺られながらマテウスさんが謝ってきた。
なんだか疲れた顔をしている。
「いえ、いいんですが……何かあったんですか？」

立ち読みサンプル
はここまで

「実はロッテがね、合格発表の結果を見て、怒ってしまったというか落ち込んでしまったというか……」
「もしかして僕のせいですか？」
「違うんだ。ライルくんに勝てないのはロッテもわかってるんだよ。アサギの成績に対してなんだ。手続きの際に渡された書類の中に特待生クラス全員分の成績が入っているのは見たかい？」
俺はまだ見ていないことを伝え、書類を取り出した。
そこには――

首席：筆記６００　武器２００　魔法２００　合計１０００
次席：筆記６００　武器１４８　魔法１２２　合計８７０
三席：筆記６００　武器１２０　魔法１４７　合計８６７
四席：筆記５６０　武器１６２　魔法１３５　合計８５７

マテウスさんが書類を見て続ける。
「ロッテはね、実技で剣を選んだんだ。その時にアサギの試験を見たらしいんだよ。ライ